

## 仕上げ用に荒茶を分類するための木茎量の数値化



写真1 荒茶の中の木茎



写真2 拝見盆に出した荒茶の上に5cm角の穴を切り出した紙を乗せた様子



写真3 5cm角の穴を拡大した様子 (写真2の上段中央部)

荒茶を製品茶にするためには、荒茶の品質に応じて篩分けや火入れを行う必要がありますが、荒茶を分類するための統一的な基準はありません。そこで、上級、中級、並茶用の3段階に荒茶を分類するため、今回は木茎(写真1)の量の多少について検討しました。

JA全農こうちに保管されていた荒茶を拝見盆(22cm角)に取り出し、審査経験を十分に積んだ茶業試験場職員によって、木茎の量を少、やや多、多(多いほど品質が劣る)に分類しました。次に、各評価の荒茶を抽出し、その上に5cm角の穴を9個切り出

表 荒茶表面の木茎数および木茎の混入割合

評価	5cm角の穴あたりの木茎数				混入割合 (%)
	平均 (本)	± 標準偏差	最少 (本)	最多 (本)	
少	6.4 ±	2.5	2.1	9.0	1.6
やや多	13.8 ±	1.3	11.6	15.1	2.3
多	19.3 ±	4.1	15.6	28.8	4.0

注) 木茎数は、各荒茶の9穴の平均値。

混入割合は、色彩選別機で選別(感度92)した木茎の重量比。

した無地の紙を置き(写真2、3)、穴から見える木茎数を数えました。

その結果、外観評価から少(上級茶用)と評価された荒茶の1穴あたりの木茎数の平均は6.4本、やや多(中級)は13.8本、多(並)は19.3本となりました(表)。また、数える穴は、平均的な3穴を選べばよいことが分かり(データ省略)、簡便な方法で分類できる可能性が示されました。

今後は、外観の他にも、味や香りの評価も数値化し、総合的に評価して誰でも同じように分類できるようにします。

(茶業試験場 澤田定広 0889-32-1024)